特色GP　人間性とキャリア形成を促す学校Internship

小中高大連携が支える学外型実践教育の大規模展開

第1回研究会

基調報告

2006年２月16日

関西大学学長補佐　品川哲彦

基調報告の内容

1. 学校インターンシップとは何か
   - 内容
   - 経緯
   - 実施状況
   - 実施体制
2. 学校インターンシップの問題提起
   - 人間形成　学外型教育
   - 小中高大連携の新たな可能性
   - キャリア形成　資質ある教員の育成とは？

学校インターンシップとは何か（1）

- 教育実習

通常、卒業年次で行う

通常、出身校で行う

教科指導が主である

取得する免許と同じ校種にかぎられる

- インターンシップ

低年次から行える

出身校とは限らない

教員の多様な仕事にふれる

取得する免許と異なる校種も体験できる

学校インターンシップとは何か（2）

- ボランティア
  単位を認定しない

- インターンシップ
  単位を認定する
  ＝大学教育の一環

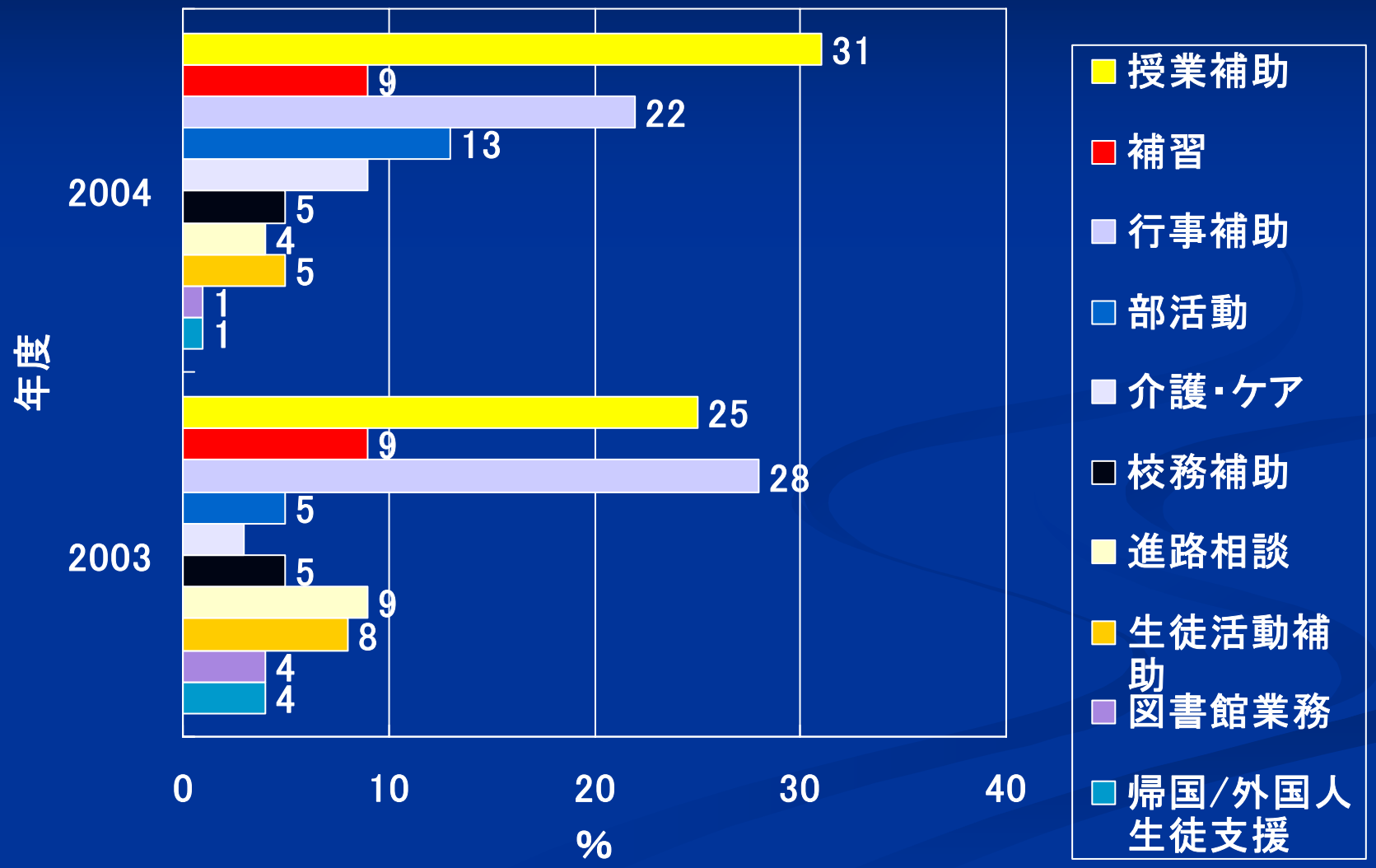
大学への届出を求めるが、基本的に、学生個人の自主的な活動

面接、事前事後の指導、保険加入等を大学がおこなう

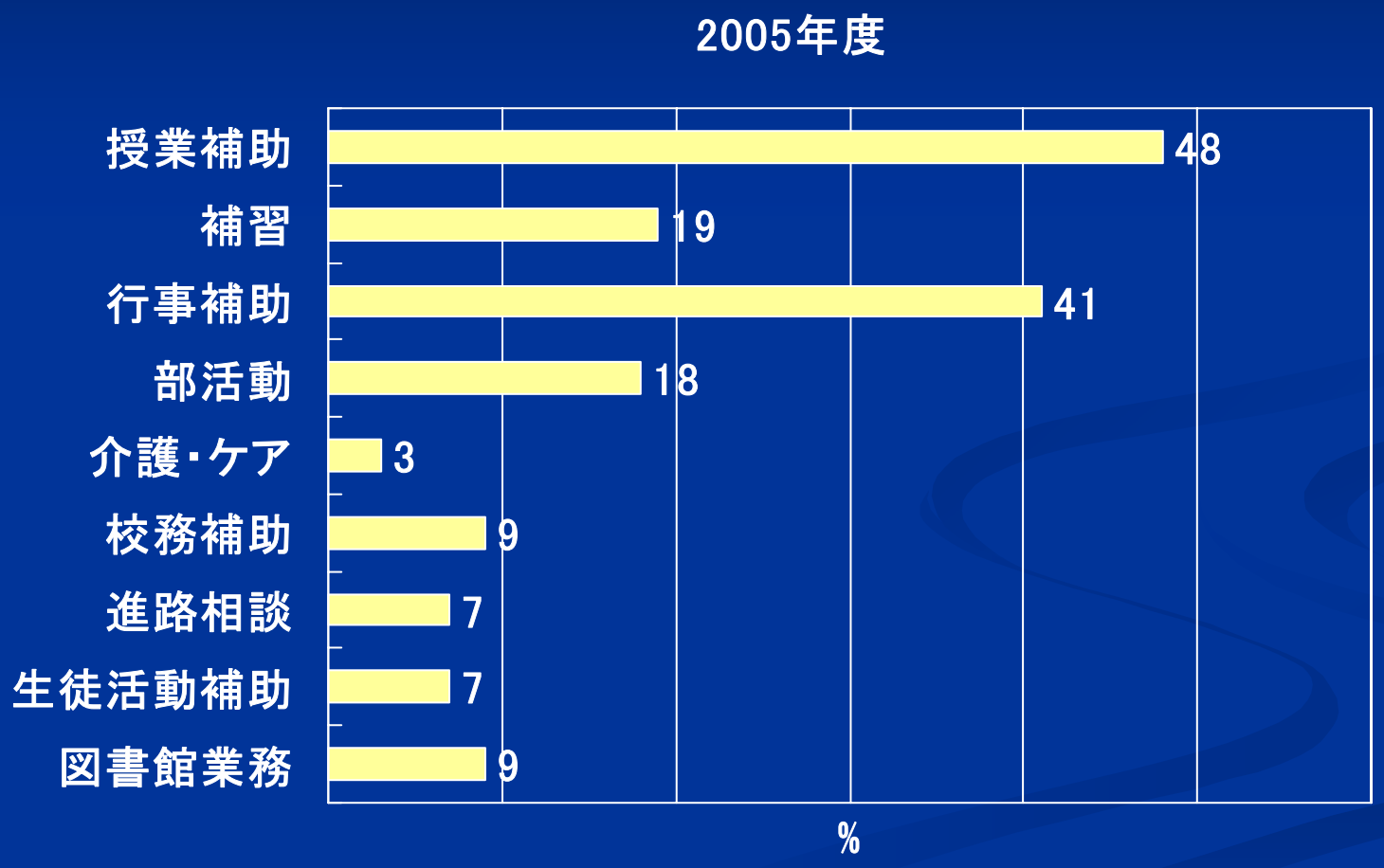
学校Internship　実施の流れ

- 受入先学校、学生への情報周知（2-5月）
- 受入校、学生の募集(4–5月）
- 学生の面接・選考、受入校とのマッチング（6月）
- 受入校での面接⇒内定(6月）
- 誓約書提出、保険加入、事前講習（6-7月）
- 実施、受入校への教員訪問（8-12月）
- 事後報告会　学生、受入校教員、大学教員の交流と成果検証(10月、12月）
- 研修報告書、業務日報をもとに単位認定（2月）
  （事前事後講習含めて45時間、を目安）

学校インターンシップの活動内容（1）



学校インターンシップの活動内容（2）

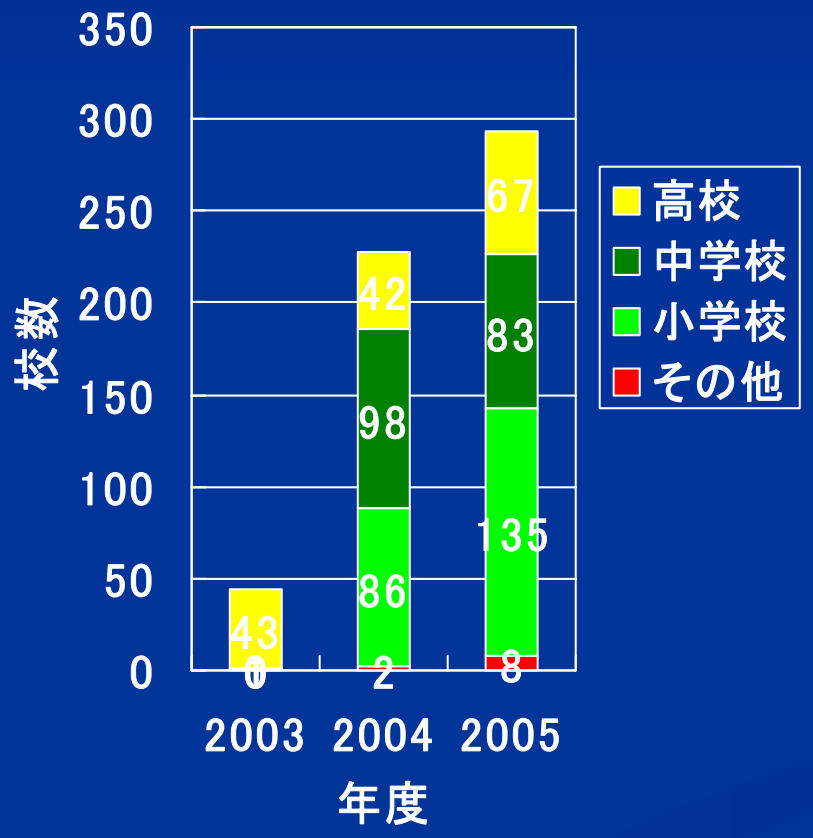


学校インターンシップの経緯

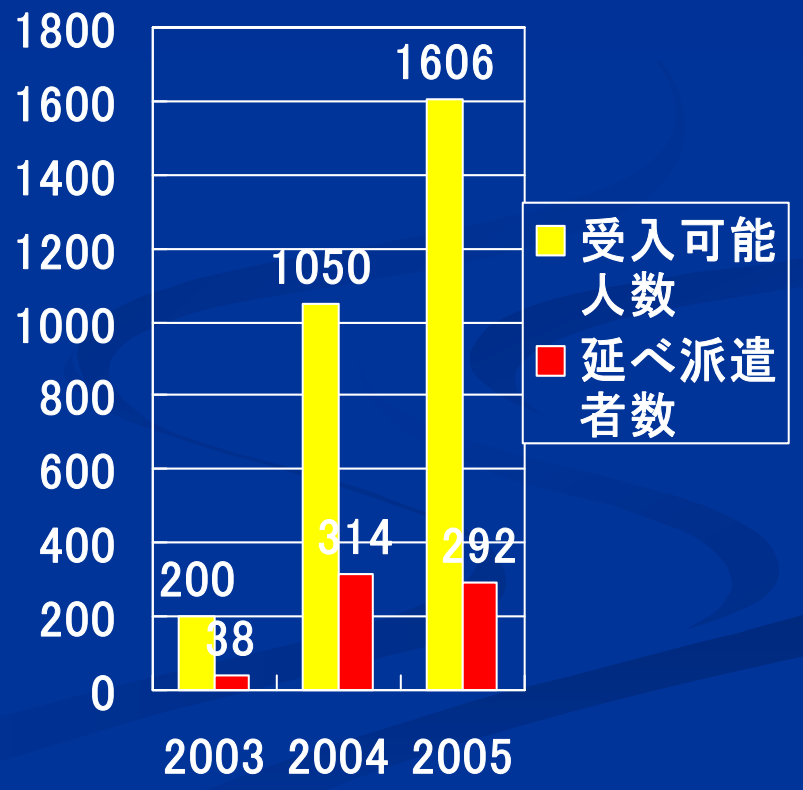
- 1997年　企業・行政でのインターンシップ開始
- 2003年　高大連携推進事務室、高大連携運営委員会の設置　大阪府・市、神戸市と連携
- 文学部が事前の市場調査(45高校対象)
  ⇒試行的に開始　87名の学生を38校に派遣
- 2004年　全学の高大連携事業に位置づけ、対象を小中学校等に拡大　301名を119校へ
- 2005年　292名を129校へ。連携協力協定を結んだ教育委員会は15に。

派遣学生数等の推移

受入申し出校数



受入可能人数、派遣者数



学校インターンシップの運営体制

大学執行部

教育委員会との連携
学長補佐→高大連携
運営委員長

学校Internship

全学共通教育推進機構
免許・資格部門委員会

教職科目での周知

高大連携運営委員会
高大連携推進事務室

運営、事前事後講習

キャリアセンター

マナー講座

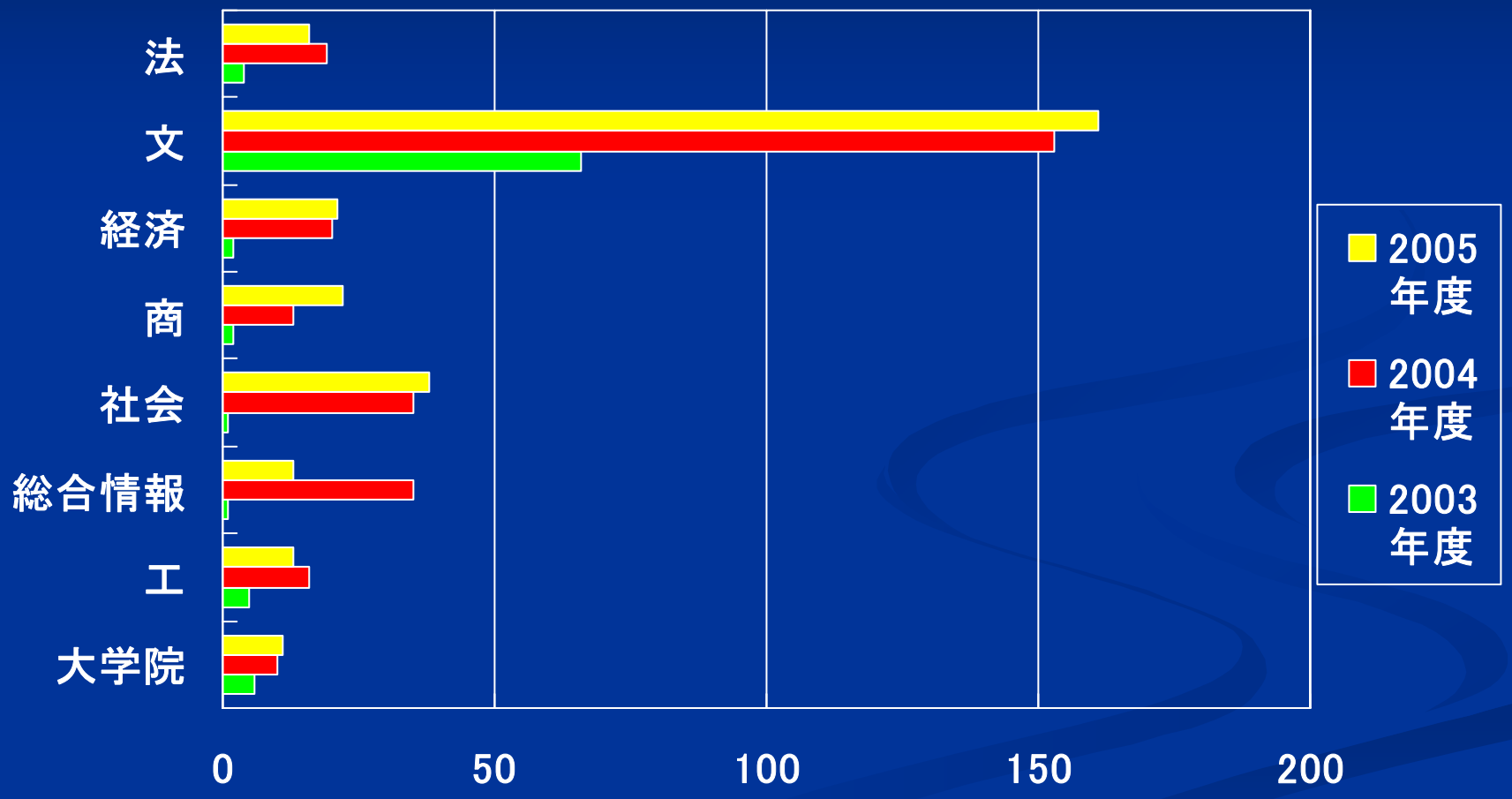
アドミッションワイドコミュニケーター

学校業務講座

7学部、外国語教育研究機構、大学院

委員選出
単位認定

学校インターンシップの全学的広がり



学校インターンシップの問題提起

人間性とキャリア形成を促す学校Internship
小中高大連携が支える学外型実践教育の大規模展開

- 人間性　→教養教育としての一面
- 学外型　→キャンパス外での活動の大学教育のなかでの評価
- 小中高大連携　→若い世代を育てる組織として学校・園と大学とが連携
  世代と世代をつなげる試み
- キャリア形成　→資質の高い教員の養成

人間形成におよぼす効果

- 年少者の世話をする
  → 年長者としての責任を自覚する
- 学校現場の活動内容の多様性
  → 指示を待っているのではなく、主体的に考え、動く姿勢
- 自分の成長のふりかえり
  → 次の段階へ目を向け、一歩、踏み出す

教養教育改革の流れ

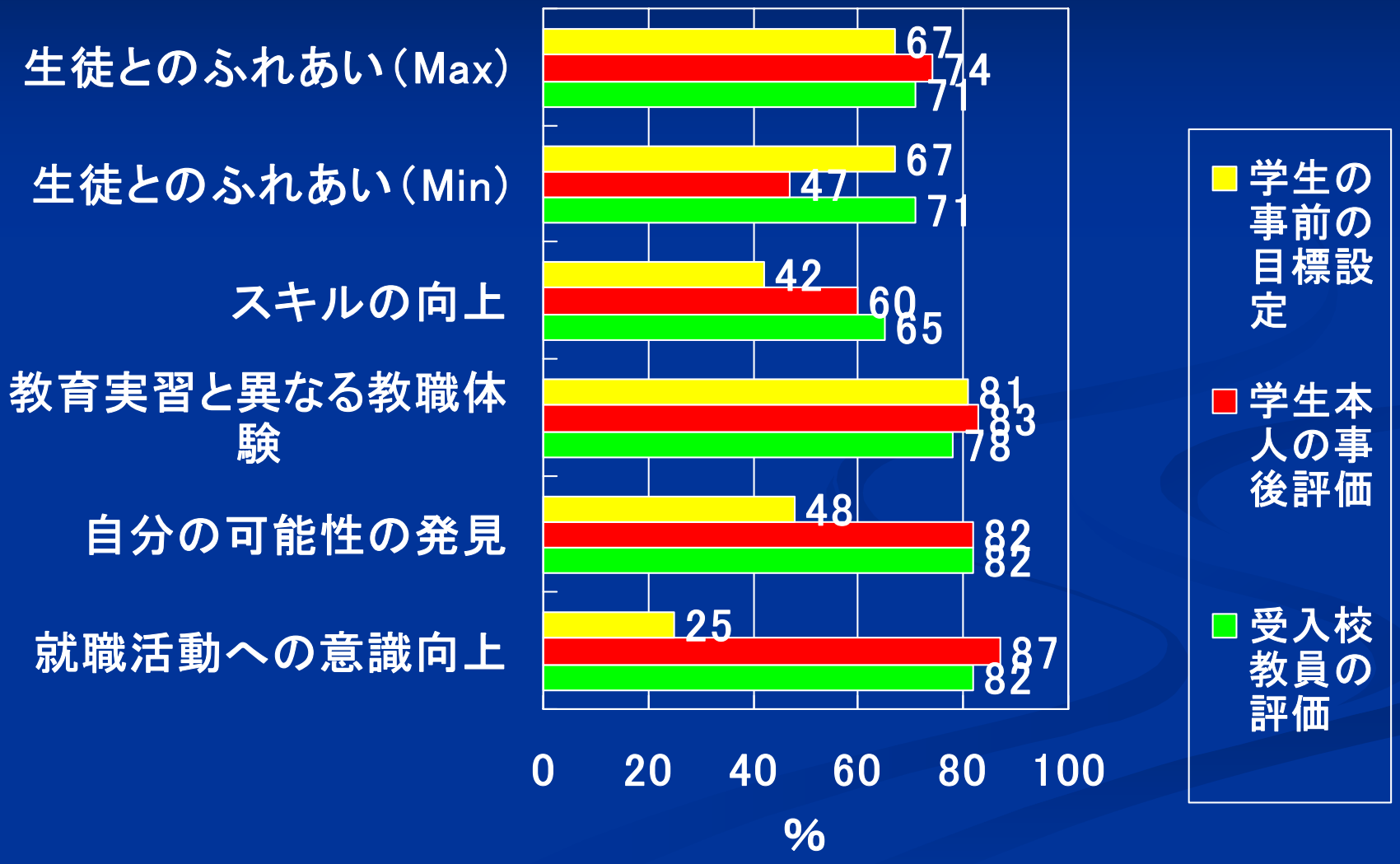
- 1991年　大学審議会「大学設置基準の大綱化」

  人文・社会・自然分野間の障壁の撤廃
  教養教育/専門教育間の障壁の撤廃

- 2002年　中教審答申「新しい教養教育の在り方について」

  高大連携の推進　　インターンシップ、留学、ボランティア活動の大学教育内部での評価

事前の目標、事後の成果検証



問題提起（1）

人間形成に役立っている。しかし———

- 人間形成という目標を大学教育のなかにどのように、どこまで位置づけるのか？

キャンパスの中に囲い込んでいるだけでは得られない効果がある。しかし——

- 学外での活動をどこまで大学教育にとりいれられるのか、とりいれるべきなのか？

学校・園からのコメント

- 大学生の存在

  生徒が活気づく

  生徒は年代の近い学生には相談しやすい

  学生の一生懸命な態度→教員のリフレッシュ効果
- 大学生の成長

  生徒とともに学生も成長している

  ぜひ、教員になって学校現場に来てほしい

問題提起（2）
小中高大連携の可能性

- 生徒の世話をすることで、学生が成長する
  →若い世代と若い世代とをつなぐ効果
- ともに若い世代を育てる組織としての学校・園と大学との相互理解の必要性
  ex. キャリアデザイン教育
  学生/生徒のモチヴェーションの向上、
  自分で調べ、考える力の育成

キャリア形成への効果

- 就職意識の向上（事前は25％が目標に掲げ、事後には87％が効果ありと報告）

  「迷っていたが、やはり教師になりたい」

  「教職科目に対する関心が高まった」

- 受入校・園による積極的な指導

  ex. 学校インターンシップ生の報告会

  毎日の業務日報に対するコメント

学校インターンシップの社会的ニーズ

- 学校現場の「若い力」に対する待望
  - 教員の年齢構成
  - 少人数教育の推進
  - 特別な配慮を要する子どもたち
- 「資質の高い」教員の養成
  - 教員養成GPの設置
  - 教育職大学院の設置

2005年度のあるインターンシップ生の研修報告書から

教室に入れず、別室で勉強する子の支援
（コミュニケーションがとれるだろうか？）

↓

（ノートに顔を描く）「この子が私をいじめたんだ」（昼休みの校庭を窓越しに眺めて）「早くあのなかに戻りたい」

↓

特別な事情があるようにみえるが、最初から特別な事情があるとはかぎらない

問題提起(3)

――――しかし、

- 「資質の高い」教員とはどういうことだろうか？
- どのようにして「資質の高い」教員は育成できるのか？
- 教育委員会と大学が共同してやれること、大学がやれることは何か？